

# 摂食障害治療プログラムの実用化に関する研究

西園 マーハ 文

## 研究実績の概要

### 研究目的

摂食障害は有病率の高い疾患であるが、日本では治療システムが整っていない。筆者らは「ガイドドセルフヘルプの概念を用いた摂食障害治療の効果研究」(2014年度研究助成)他、精神科病院での治療効果を検証してきた。その結果、4週間プログラムの効果を示すことができたが、より短期の治療へのニーズも大きい。プログラムの実用化に向け、今回は、短期の効果について検証した。

### 対象と方法

関東の精神科G病院において、摂食障害4週間入院プログラムを実施した患者のうち、中間時点でのデータが得られた6例について症状の変化を検討した。対象は全例女性で、18歳から30歳であり、神経性やせ症摂食制限型(ANR)2例、神経性やせ症過食嘔吐型(ANBP)3例、神経性過食症(BP)1例であった。対象からは研究参加への書面同意を得、本学研究倫理委員会の承認を得て研究を実施した。

入院時(Time 1:T1)、2週間経過後(T2)、退院時(T3)に、複数の質問紙を実施した。ここでは、Eating Disorder Inventory 2 (EDI-2)、Beck Depression Inventory- II (BDI- II)の結果の一部を示す。退院後、外来でのデータが得られたものはT4として示す。

### 結果と考察

図1に結果の一部を示すが、T2で得点が低下したサブスケール(ss)が多かった。EDI-2において、T2で低下した後、T3でT1以上に増悪した

ものは、やせ願望ss、身体不満足ss、禁欲ssで各1例のみであり、2週間後に点数が低下した者は、退院時には入院時より軽快する傾向を認めた。やせ願望などは、変化しにくい心理と考えられがちであるが、早期に変化する場合も多いことから、より短期のプログラムの可能性も示唆される。今後は事例数を増やし、短期の効果が期待される当事者の特徴を明らかにする予定である。

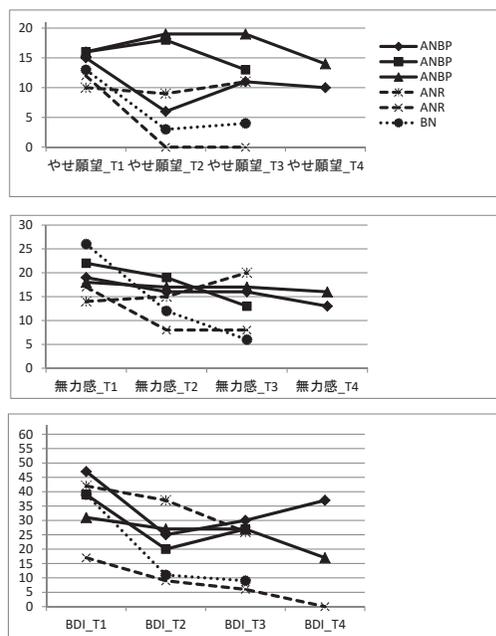


図1 EDI-2やせ願望、無力感サブスケールとBDI- II抑うつ得点の変化